



京都大学
KYOTO UNIVERSITY

総合人間学部／大学院人間・環境学研究科

Faculty of Integrated Human Studies / Graduate School of Human and Environmental Studies

No.

74



2025.3

総人・人環 広報

特集 ご退任を迎えられる先生方から

京大での47年——キャンパス風景の変容.....	吉田 純.....	2
なにもない.....	小倉 紀蔵.....	4
「二冊の本」始末.....	道坂 昭廣.....	6
学問が進歩すること.....	玉田 芳英.....	8

新任の先生方より

大きな喜びを胸に.....	久木元 美琴.....	10
セラミックスの醍醐味.....	許 健.....	11

ご退任を迎えられる先生方から

京大での47年——キャンパス風景の変容

吉田 純

(大学院人間・環境学研究科 人間・社会・思想講座
総合人間学部 人間・社会・思想講座 (人間科学系))



京都大学教育学部に入学した1978年4月から半世紀近くもの47年間という時間を、吉田キャンパスに通いながら過ごしてきた。学生・院生から教員へと立場は変われど

も、人生の3分の2以上もの長きにわたってこの組織の一員でありつづけてきたという事実、今更ながら愕然としている。

私の入学当時にはまだ、時計台に大書された「竹本処分粉碎」や、大学内外の至るところに林立するタテカン、あるいは教室や廊下にあふれる無数のビラなどに、いわゆる「ゲバ文字」が踊り、授業中にはクラス討論と称して赤ヘルの先輩が乱入してくることも珍しいことではなかった。すでに学生運動華やかなりし時代は過去に遠ざかりつつあったし、私自身もそうした——過去の余熱を必死に留めおこうとするかのような——風景や雰囲気には、当時はどちらかといえば共感よりも違和感の方をより多く抱いていたように思う。

だが最近、その頃の風景の意味を考え直す機会が何度かあった。それはFacebookなどで、現在のキャンパス風景の写真を投稿すると、何人かの京大の先輩・後輩諸氏から「昔に比べると綺麗すぎて、なんだか反感を感じる」といった趣旨のコメントをもらったときである。上述のとおり、私自身はかつてのカオス的ともいうべき京大の風景に必ずしも強いノスタルジアを覚える向きではな

かったが、キャンパスを「綺麗すぎる」——すくなくとも、当時を知る人びとにはそう感じさせる——空間へと変容させた40数年の時間の意味について、考えざるをえなくなったのだ。

この40数年は、さまざまな意味で、京大ないし日本の大学全体をめぐる環境を激変させた時間だった。キャンパス風景の変容は、その激変をおそらく反映している。ここはそのことの是非について論じるべき場所ではないので、その議論は差し控えたい。ただ、かつての京大の、カオスをも許容するような高度な寛容と自由とに満ちた環境の中でなければ、私のように意志薄弱かつ優柔不断な人間は、おそらく研究者の道に進むことはできなかったのではないか——今にしてそんな風に思うのだ。

学部生時代、私は将来の目標もはっきりせず、結果的に勉学にはまったく身が入らず——現在に比べると「大甘」としかいいようのない当時の京大の教育制度の中であってさえ——2年も留年した末、今となっては思い出したくもない、レベルの低い卒業論文をなんとか書き、教育学部を卒業した。それからさらに2年間、文学部の聴講生というややマージナルな身分に身を置きながら、ようやく社会学という学問に少しずつ関心を抱きはじめ、大学院進学を考えるようになった。要するに、1986年に修士課程（文学研究科社会学専攻）に入学するまでの4年間、私は長いモラトリアムの期間を過ごしたわけだが、今になって振り返ると、それは私にとってやはり必要な試行錯誤のた

めの時間であり、そして当時の京大という——良い意味でルーズな——環境こそが、それを許容してくれたようにも思う。

それから文学研究科の博士後期課程、助手（当時）を経て、2001年4月、総合人間学部の助教授（当時）に着任した。その時にはまだA号館（現・総合館）の旧本館をはじめ、教養部時代からの建物もかなり残っていて、やはり少し入学当時を思い出して懐かしさを覚えた。助教授時代の研究室はA号館南棟の1階にあり、おそらく建物の建設当初から設置されていたであろう古めかしいチーム暖房——残念ながらその数年後、耐震補強工事のときに撤去されてしまったが——のおかげで、冬はとて暖かかったのをよく覚えている。

2004年4月、高等教育研究開発推進センター（当時）の教授に昇任すると同時に、新築されたばかりの総合館北棟4階の研究室に引っ越した。真新しい部屋には、なかなか片付ける暇がなく、本を詰めた多くの段ボール箱が半年間ほども山積みになっていたのを覚えている。その北棟の新築に合わせて、吉田南構内正門からみたキャンパスの風景は、ほぼ現在あるような姿——上述の、Facebookで私の写真をみた先輩・後輩諸氏が「綺麗すぎる」とコメントした風景——になった。かつて教室や廊下を埋めていたおびただしいビラが姿を消していったのも、その頃からだったように思う。2004年度というのは、奇しくも京大を含むすべての国立大学が法人化された年度に当たるが、そのこととも考え合わせると、吉田南構内の風景の変容が、大学の組織のありかたや制度的環境の変容とぴったり符合していることが、単なる偶然ではないような気もしてくる。

——それから早や20年が過ぎ、このキャンパスを去る日が近づいてきた。昨年夏、院生有志が退職記念論集を企画してくれたのだが、その一環として、私のライフヒストリーを語るインタビュー

を受けるという貴重な機会があった。さすがに社会調査や理論研究の経験を積んできた院生たちだけあって、かれらの巧みな問いかけに応じて、自分自身もあまりはっきりとは意識していなかった、これまでの研究や教育、あるいは周囲の人びとへの関わり方等々のもつ意味について、多くの新たな気づきを得ることができた。そして、インタビュー終了後の写真撮影時に、意外な質問を受けた——「このキャンパスで一番好きな場所はどこですか」と。少しだけ考えて、すぐに私の答は出た。「総合館の中庭ですね。」

総合館（旧A号館）の中庭には、かつては三高時代からの木造校舎が存在し、私は1回生のころ、池田浩士先生のドイツ語の授業をそこで受けた記憶がある。その木造校舎こそ現存しないが、あの中庭とそこに立つ樹々は、おそらくは私の京大入学当時からの——いや、それよりもっと遠い過去からの——記憶を今も留めているのではないか。あの中庭を歩くとき、単なる懐かしさだけではない、不思議な安心感のようなものを覚えるのは、そのためだろう。

*

キャンパス風景のことばかり書いてきたが、最後に一言。総人・人環に在職した24年間——高等教育研究開発推進センター在任時も人環の協力教員かつ教授会構成員でもあったのでそこに含まれる——は、個性あふれる多様な専門分野の先生方——年長・年少を問わず——から受けた数々の知的刺激、講義やゼミでの私のつたない話やコメントを真剣に聴き、数々の知的応答を返してくれた学生・院生諸君の熱意、そして優秀な事務職員の方々の的確なサポートなしにはありえなかった。それらすべての方々への深い感謝を込めて、この一文を閉じたい。

（よしだ じゅん）

ご退任を迎えられる先生方から

なにもない



総人・人環に19年お世話になった。素晴らしい学生や同僚や事務担当の方々に恵まれ、実に充実した時間を過ごすことができたと思っている。こ

ころから感謝したい。

この19年間のわたしの思いをひとことというなら、「攻められなかった」というものだ。「攻めなくちゃ、攻めなあかん、攻めなくては、だけど攻められない」という不完全燃焼で終わってしまった。「防御で終わってしまった」という意味である。多数多様な相手から次々と放たれてくる要求に受け身で応答しつづけているあいだに、気づいたら試合が終わっていた、という感じだ。形勢を逆転することは最後までできなかった。わたし自身の能力もなかったし、身内のケアなど、ひとのいのちにかかわることに多大な力を注がねばならなかった苦しい19年間でもあった。

そもそもわたしは、(第三高等学校および京都帝国大学の歴史を含めても) 京都大学ではじめての朝鮮語の専任教員として、着任した。そのことの意味は、よくわかっていた。というのは、わたし

小倉 紀蔵

(大学院人間・環境学研究科 東アジア文明講座
総合人間学部 東アジア文明講座 (文化環境学系))

よりも以前に、もっとその任にふさわしい人間が多くいた、という意味だ。

在日朝鮮人・韓国人はかつて国立大学の教員になれなかった。むしろわたしが着任するよりもずっと以前に、在日のひとがこの任につくべきであった。たとえば京大で朝鮮・韓国の思想を講じるならば、姜在彦先生がもっともふさわしい人物であったとわたしは思う。しかしそれは実現できないことであった。だからこそ、わたしは在日のひとたちの思いも背に負って、もっと攻めるべきだったのだが、それができなかった。

わたしの亡き義父は二中・三高から京大の物理を出て東大の大学院に学んだ在日韓国人だった。だが日本の大学には就職できなかった。京大・東大でともに学んで韓国に帰った同胞の中には、解放後まもなくの韓国のアカデミアで重要な役割をになって活躍したひとたちが多くいた。しかし義父は日本に残る選択をした。古き良き旧制高校の伝統を身心ともによく引き継ぎ遺したひとで、その読書の多くが哲学書であり、哲学的な談義を好んだ。8歳の少年のころ朝鮮から京都に来て、湯川博士に憧れて物理をやった義父は、「この世界に京大ほど素晴らしいところはない」という強い信

念を持っていた。娘婿が京大で朝鮮韓国思想を講
 じることになったとき、ことさらに喜んでくれた
 のもすでに20年前のことである。しかし結局、わ
 たしはここでなにごともしえないうまま去ってゆ
 くことになった。Mein Geschäft auf Erden ist
 aus. Ich bin voll Willens an die Arbeit gegangen,
 habe geblutet darüber, und die Welt um keinen
 Pfening reicher gemacht. と語ったのはヘルダリ
 ンのヒュペーリオンだが、このことばをもじって
 いうなら、「大学でのわたしのしごとは終わった。
 わたしは意志に満ちあふれてしごとに立ち向か
 い、血を流しはしなかったが懸命に取り組んだ。
 だが結局、世界を少しでもゆたかにすることはな
 かった」ということになる。のこしえたものは、
 なにもないといってよい。

さて、今後のわたしの生活は、杜門不出（門を
 かたく閉じて外出せず）となる。世間さまとはほ
 ぼ関係を断ち、ひたすら勉強と執筆にのみ没頭す

る生活にはいる。65歳でようやく手にすることが
 できた特権か。とてもうれしい。ついに真の研究
 生活を始められるという気持ちだ。もし10年後に
 まだ生きていて、再び娑婆に姿をあらわすことが
 できたとき、京都の薄暗い飲み屋の脇っちょかど
 こかでみなさんと偶然に出逢って「あっ！」と叫
 ぶことができれば、望外の幸せである。

わたしの愛する唐の李賀の詩「開愁歌」の一節
 を記して、終わりとしたい。

壺中 天に喚（よ）ぶも雲開かず
 白晝萬里 閑（しづか）にして淒迷
 主人我に勧む 心骨を養へ
 俗物の相填諷するを受くる莫れと。

最後の2行は、「酒場の主人はおれに忠告す
 るぞ。おまえは心骨を養え。俗物どもがつるんで
 あだこうだとうるさくつきまとうのを、受け入れ
 てはなりませぬぞ」の意。いいことばです。

（おぐら きぞう）

ご退任を迎えられる先生方から

「二冊の本」始末



着任の時に何か書くようにということで、確か「二冊の本」という題名で吉川幸次郎先生他『新唐詩選』と小川環樹先生『唐詩概説』を紹介した（と

思う）。

高校時代、吉川先生の『新唐詩選』を読んで中国文学に興味をもち、大学に入って小川先生の『唐詩概説』を読んで、吉川先生によって紹介された唐詩人たちの高揚した精神は、放恣なものではなく、様々な試行錯誤ののちに整えられていった規則のもとに行われた表現であることを知り、もう少し勉強してみたくなり大学院に進み、今に至るといったことを書いた（ような気がする）。

この二冊の本は今も時に読み返す。吉川先生の熱意あふれる語り口と小川先生の静かな語り口は対照的ではあるが、吉川先生の熱情には言葉に対する深い考察があり、小川先生の静謐には文学に対する愛情があることを感じられるようになった。これは興膳宏先生はじめ多くの先生や先輩友人たちの指導のおかげである。そう言えば大学院時代の興膳先生の演習や講義に流れていた雰囲気

道坂 昭廣

(大学院人間・環境学研究科 東アジア文明講座
総合人間学部 東アジア文明講座 (国際文明学系))

も熱気と冷静の両方があった。先生のあの授業はご自身の教養と深い思索から生まれたことも、今になってようやく少しわかってきたような気がする。何事も私は鈍い。4年で出て行くはずだった大学という場所で50年近くを過ごすことになってしまったことも、結局はそういう鈍さに原因があるのかもしれない。

キャンパスをふらふらしていた学生が、1988年4月から突然教師となり大学をうろうろすることになった。何か居心地の悪さを感じたのを覚えている。その感じは結局今日まで消えることなく、おろおろし続けた。

教師としての私の担当授業の大部分は中国語であった。いろいろな意見があるが、私には中国語は難しかったし今も難しい。教えるのはもっと難しかった。もう一つ全学共通科目として、中国古典講読を担当した。この授業はその時々私の興味でテキストを選んだ（非常勤講師として出講していたときから担当していたが、ある時私がノルマ以上に全学共通科目を担当していることが判明して、この授業は中止となった）。この科目は一定の進捗で計画的に授業を進めることができなかった。陸游『入蜀記』をテキストを選んで読んでい

た時期がある。この書は彼が故郷の紹興から当時の首都杭州を経て長江に出て、四川（蜀）の任地に向かう船旅の記録であるが、授業の進度は船より遅かった。読み始めた時期に受講していた学生で、現在立派な研究者となって活躍している方から、「長江にさえ、なかなか到着しませんでした。結局四川までたどり着いたのですか」と聞かれたことがあった。2年か3年読んだが、三峡にもたどり着かなかったのではなかったか。汗顔の至りである。

大学院の授業も同じで、興膳先生がなさった授業のような雰囲気再現したいと思っても、私が及びもつかない以上望むべくもなく、受講生からの鋭い指摘に狼狽するしかなかった。中国の民国時代の著名な研究者がエッセイのなかで、初めて教員となって赴任するとき、「教員に知らないことがあると学生は失望し、教員を馬鹿にする。だから知らないといっけはいけない」と、自分の先生から注意を受けたということを書いていた。私は最初から最後までずっと失格のままであった。

結局私が大学に居続けることができたのは吉川先生と小川先生の文章に魅了され、両先生に直接教えを受けた世代の先生方から教えを受けることができたという幸せな記憶を忘れられなかったからであったと思う。先生方と比べるのもおこがましいが、教員としての私は、授業中は受講生の質問にあたふたとし、授業後は己の準備不足と考えるの足りなさを後悔し、体力と精神をひたすら消耗した。ただ優秀で熱心な受講生も多く、楽しいことがなかったわけではない。彼らにお礼を言わね

ばならない。

二冊の本は全く知らなかった世界を私に教えてくれたし、大変幸福な出会いの機会も与えてくれた。ただこの二冊の本をきっかけに教員になってしまい、こうして定年を迎えることになったことにも不思議な気がする。ずっと大学という場所にいたので、学生から教員に身分が変わったときと同じように、自分の何が変わったのか実のところよくわからない。ではお前は何なのだと問われれば、中国古典世界という書生ですと答えるのが、私の気持ちに一番近いような気がする（少なくとも書生でいたかった）。ただ書生とすれば、「白面書生」のまま成長がなかった（「白髪」書生にはなったが）。そのまま明日から、いや今日から老書生である。「白面」から「老」に変わることは、「学生」から「教員」に変わったときのような戸惑いはない。むしろほっとした思いがある。ただ「白面」のまま成熟することのなかった私は、同僚諸先生、事務の皆さまにご迷惑をかけ続けた。お詫びとお礼を申し上げたい。

以上「老生常談」、失礼いたしました。

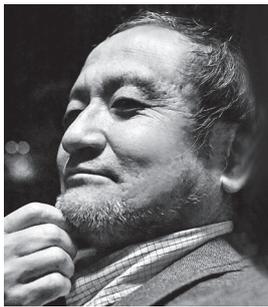
（みちさか あきひろ）



北京大学中国語学文学系にて

ご退任を迎えられる先生方から

学問が進歩するということ



京大の北部構内、理学部の南門を入り北へしばらく進むと、理学研究科4号館の南に松の木が生えたこんもりとした丘があるのをご存知の方もいらっしゃるかと思います。

これは鎌倉時代の火葬塚を復原したものです。火葬塚とは、天皇とその近親者の火葬を行った場所に設けた施設のことです。1978年度に行った、理学部合同建物の新営に伴う発掘調査で見つかり、その重要性から建物の設計を変更して保存し、復原しました。近くの吉田泉殿町には、村上天皇皇后安子の火葬塚がありますね。この様に、私たちが研究、教育活動を行っている京都大学の構内には、全域に過去の人間活動の痕跡をとどめた遺跡が広がっています。人間・環境学研究科の構内にも多くの遺跡があります。そのうちのひとつについてみていきたいと思います。もう40年以上前のことですので、記憶違いがあるかも知れませんが、ご寛容下さい。

私は学生時代、考古学を学んでいました。1982年の春には大学院入試に失敗し、経験を積み、勉強を進めるために京都大学埋蔵文化財研究センター（現在は京都大学大学院文学研究科附属文化遺産学・人文知連携センター。）が行っている発掘調査に参加しました。吉田食堂を建設するための事前調査です。発掘調査は1981年11月20日に

玉田 芳英

(独立行政法人国立文化財機構 奈良文化財研究所
都城発掘調査部 特任研究員
大学院人間・環境学研究科 文化・地域環境講座)

始まりましたので、その時にはかなり進んでいました。縄文時代から近世までの遺構が見つかり、その中にそれまで見たことがないような遺構が3つありました。2つは一辺2.5m程度で、深さ約1mの隅丸方形の土坑で、真ん中の一回り小さい土坑と合わせて3つが東西に並んでいます。全体に焼けた痕跡が認められ、鋳型や金属を溶かすための溶解炉の破片が出土していました。私はその調査に直接には関わりませんでしたが、担当者のIさんは全体の構造を明らかにすべく、慎重に掘り進めていました。SK257と名付けられた東端の土坑の底には、黄色い粘土を焼き固めた、クリスマスケーキの様な形をした「定盤」（じょうばん）がありました（図1）。定盤の下には井桁状に丸太材を組み、鉄釘で結合しています。また、土坑の底には西側に南北方向に並ぶ4基の柱穴があります。

SK245と名付けられた西端の土坑の底には定盤は残っておらず、中央部に長さ約1.5メートルで幅0.2メートルの2本の東西方向の溝があります（図2）。溝の両端は円形で、その部分で両溝がつながっています。また、土坑の四隅には柱穴がありました。これらの遺構は、出土した土器から平安時代中頃のものだということがわかります。

はて、これらの土坑は一体何か。全体に焼けた痕跡があることと、鋳型が出ていることから、何かを鋳造した跡だということはわかります。はて、何を鋳造したのだろうか。そこからIさんたちの探求が始まります。

発掘調査を行った1980年代初めには、ちょうど各地で同じ様な遺構が見つかり始めていました。兵庫県多可郡中町（現在は多可郡多可町。）の多可寺跡で似たような遺構が出ていると聞いたIさんは、早速見に出かけていきました。帰ってきたら、「全く同じやったわ！」と興奮気味です。

では、この遺構では何を铸造したのでしょうか。出土した鋳型を観察すると文様が彫り込んであり、それは梵鐘の文様に似ています。考古学の研究では、民俗例を参考にすることが良くあります。Iさんは全国の梵鐘の7割を铸造している富山県高岡市に、梵鐘铸造作業を見学に行きました。その様子は、台の上に鋳型を据え付け、鋳型が破裂しないように鋳型の上下に掛木を渡して紐で縛り、溶けた銅を流し込むというものでした。これは見つかった遺構の様子にそっくりです。SK245にある2本の溝は鋳型の下に置いた掛木の痕跡で、両端の丸い部分で紐を通したのでしょうか。掛木の上にはSK257にみるような定盤を据え付け、鋳型を置いて铸造を行ったと考えられます。鋳上った梵鐘は、鋳造坑内に柱を立てて構架材とし、紐を掛けて吊り上げたことも推定できます。SK257底の南北方向に並ぶ4基の柱穴と、SK245の四隅の柱穴がそれにあたるとでしょう。

考古学に限らず、それまで用途や性格が不明

だったものが、一例でも解明されると類例が続々と明らかになり、研究法が確立していくことがあります。この梵鐘铸造遺構研究の一連の流れは、まさにそれにあたると感じました。その経緯を私はつぶさに見ることができ、「学問はこの様にして進歩していくのだな」と感動しました。未知のものに出会った時、まずつぶさに観察し、類例とみられるものを探し、他分野の事例も参考にして研究を進めていくという姿勢は、それ以後の私の研究生生活のうえで基本的なものとして、ここで身につけることができたのです。

発掘調査で発見した遺構は、ほとんどが壊されてしまっていますが、この梵鐘铸造遺構は重要性から埋め戻して保存されました。吉田食堂の南に、鋳造遺構の模型と説明板があるのを見たことがある方もいらっしゃるでしょう。私もこの模型を目にする度、当時のことがよみがえり、新たな気持ちになりました。文学研究科を修了してからは奈良で勤務していましたが、2013年度から客員教授として吉田キャンパスに戻ってきました。3月末で退職しますが、私の研究者としての原点と言えるこの地で、研究生生活の最後を過ごせたのは幸せでした。長い間、ありがとうございました。

（たまだ よしひで）



図1 SK257 全景（北から）

（京都大学大学院文学研究科附属文化遺産学・人文知連携センター提供）



図2 SK245 全景（西から）

新任の先生方より

大きな喜びを胸に

久木元 美琴

(大学院人間・環境学研究科 文化・地域環境講座

総合人間学部 文化・地域環境講座 (文化環境学系))



4月に文化・地域環境講座(文化環境学系)、地域空間論講座に准教授として着任しました久木元美琴と申します。都市地理学、福祉・公共サービスの地理学を専門としています。

出身地は鹿児島で、大学からポスドクまでを東京で過ごし、就職後は、奈良、大分、神奈川と、移動してきました。何度も引っ越しするのは本当に大変なのですが、フィールドワークを礎とする学問分野にいるせいでしょうか、自分にとって未知の土地で新たに生活を組み立てていくのは、初めてのフィールドでの参与観察のように五感を刺激され、環境変化のストレスも含め、結局は面白がってしまうようです。

このような経緯の中でも、このたび京都大学で働く機会を与えられたことは、私にとってとりわけ大きな喜びでした。その理由の一つは、私事で恐縮ですが、一昨年に他界した父の憧れの大学が、ここ京都大学だったということです。長く入院していた父との面会が数年ぶりに許可された日、ベッド脇に座り京都大学のことを話したのが、父との最後の会話になりました。4月1日に辞令をいただいた時、これまでも増して深い感慨に包まれたのは、そのような思い出もあってのことでした。

私の専門は上述の通りですが、具体的には、「保育・子育て支援の地理学」を探究してきました。これは、保育・子育て支援をめぐるサービス需給の地域差とその背景について、都市空間構造や産業構造・家族構造の地域差といった点から明らかにする、というものです。保育サービスの需要には利用者の生活空間や働き方が強く関係している

ため、その背後にある産業、家族、都市空間それぞれの構造とその変化を考慮することになります。また、供給体制もローカルな文脈に規定されています。これらの空間や地域的文脈といった視点を踏まえた保育・子育て支援の在り方を考えたい、と同時に、保育や子育てという営みや現象を通じて都市について考えたいという思いもありました。最近では、フォーマルなサービスのみならず、家族やコミュニティの相互扶助、自然条件などのインフォーマルな領域を組み合わせたケアのあり方に注目しています。最終的には、地域的文脈を踏まえたケアのあり方を考える「ケアの地理学」につなげていきたいと考えています。

研究の点からも、ここに来られたことは大きな喜びです。人間・環境学研究科には多様な研究領域の先生方が所属していらっしゃるの、幅広い情報に触れられますし、交流機会を得る可能性もあります。学術越境をめざす優秀な学生の皆さんからも多くの刺激をもらえるとと思います。また、都市地理学者の一人として、東京の外に暮らし、東京を相対化したいという気持ちを持っていたのですが、それが叶いました。これまで私は、大都市として主に東京圏をフィールドとしてきましたが、研究を進めるなかで、また、自身の居住歴を経て、東京の特殊性を感じるが増えてきました。ケアと都市空間の問題について検討を深めるためにも、京阪神都市圏をフィールドとした調査を進め、一極集中の進む東京圏の都市空間構造やケア・再生産をめぐる問題構造を相対化したいと思っています。

今はまだまだ目の前のことに精一杯の日々ですが、着任の日の喜びを忘れず、少しでも良い仕事ができるよう精進したいと思います。今後とも、どうぞよろしくお祈りします。

(くきもと みこと)

新任の先生方より

セラミックスの醍醐味



2024年4月より物質科学講座の助教として着任しました。人間・環境学研究科に加え、地球環境学学部の親環境フォトセラミック材料化学分野も担当しております。昨年度まで、四年近く物質・材料研究機構（NIMS、つくば市）にて研究員を務

めておりましたが、今年度から教員として、人環・学堂両方の研究だけでなく教育にも携われることをワクワクしています。大学教員としての使命感及び責任感も大きく感じております。

出身は中国の江蘇省、中3の時、歴史教科書から「小碗の中の大宇宙」と呼ばれる南宋時代の「曜変天目茶碗」を知り、その魅力に触れてセラミックスの不思議さを強く感じました。修士課程在学中に、ある見学の機会をきっかけに、初めて海外見学の目的地は日本でした。この経験を通じて、日本文化、とりわけ日本社会における「向上に向上を重ねる」という姿勢及び「匠文化」に深く感銘を受けました。当時は、将来的に日本での留学を通じて専門知識を学ぶだけでなく、研究者として文化の架け橋となり、日本文化を中国の若者に伝えると同時に、中国の文化を日本に紹介する役割を果たしたいと単純に考えました。

修士課程で自然科学を勉強しているうちに、物質の無限の可能性に魅了され、知らないことへの興味がどんどん湧いてきたことを経験しました。そして専門分野である「材料化学」は、自然科学の知識を融合し、材料構造と性質を原子レベルで解明し、新たな発見や応用を考案することで、現代及び将来の科学と産業の基盤となる分野であると確信しています。

先人の智恵や経験を踏まえ、自分の想像力を発

許 健

(大学院地球環境学学 学舎 資源循環学廊
大学院人間・環境学研究科 物質科学講座
総合人間学部 物質科学講座 (自然科学系))

揮して、まだ誰も作ったことがない物を創するという使命感を抱き、人・環の相関環境学専攻（当時）博士後期課程へ進学しました。2014年4月に編入した時、研究室内唯一の外国人学生となり、幅広い基礎科目の勉強と共に日本人学生と日本語の学習をほぼゼロから行い、研究室で行われる雑誌会や輪読会など日本語で発表・発言したり、材料化学三回生実験のTAを務めたりしました。その時、物質と同様に人間も無限の可能性を持つことを改めて強く感じました。

2014年1月に来日してから11年が経ち、今年度は日本での生活が12年目に入りました。現在、セラミックスの透明化による新型透明蓄光材料の開発や温度変化に伴う二つの励起状態からの発光強度変化を利用した蛍光温度計など無機発光材料を中心に研究を行っています。また、外部光励起を必要としない新規近赤外域生体イメージング技術や広い温度範囲内イン-サイチュかつ微小領域での高分解能を持つ温度センシングなどの応用へも展開しています。

人・環には文理両道、好奇心旺盛な学生が多いため、彼らが自ら成長するための機会や刺激を与え続けることが重要だと考えています。例えば、化学の問題を物理や材料科学の観点から考えたり論じたり、逆に材料科学の問題を化学の観点から議論することも頻繁に行うと思います。私自身が材料工学出身でありながら、ある一つの科目を独立したものとして捉えるのではなく、時代には遅れない、他の科目での講義内容との関連性や類似性が少しでもあれば、多少の脱線をして「化学」だけでなく「科学」そのものを楽しんだり追求の醍醐味を学生に感じてもらえるよう心がけています。

今後とも何卒よろしくご厚意申し上げます。

(しゅう けん)

総人環

編集後記

◆『総人・人環広報』第74号をお届けいたします。今号では、この3月末をもって退職される4名の先生方、および新任の2名の先生から御挨拶を頂戴しました。ご退職される先生方が寄稿されました文章を拝読いたしますと京大の古き良き時代から現在に至るまでが一気に俯瞰されて、あたかも4冊の壮大な伝記を

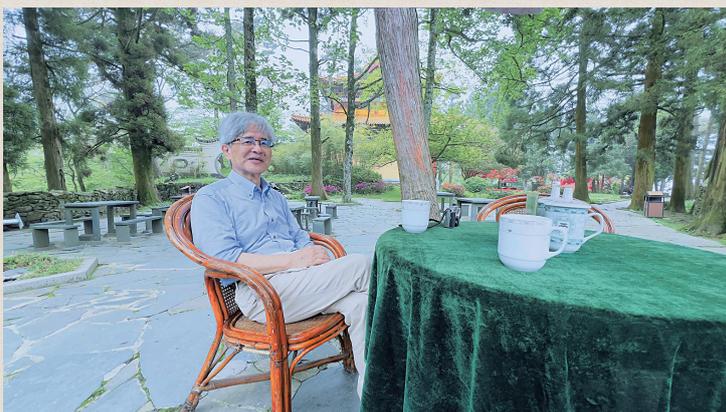
通読させていただいたかのような気持ちになりました。いずれも、なんて胸に染み入る文章なのでしょう。また、新任の2名の先生からの御挨拶の文章を拝読すると、フレッシュな、まるでさわやかな風が身の回りを通り過ぎていくような感覚を覚えます。私自身は自分の出身研究科に着任して8年、退職まであと11年ということではほぼ中間地点に差し掛かりましたので、思わず、自分が今いる位置がどのようなものかを考えることとなりました。
(S. H.)



総合館中庭



職場で40年近くサッカーを続けてきました



中国：廬山



総合人間学部
人間・環境学研究科

広報委員会